

発行責任者
公益社団法人隊友会 神奈川県隊友会
湘南支部長 清崎 忠園
平塚市豊原町 23 - 14
Tel(Fax) : 0463-31-6718

隊友

湘南支部ニュース

国民と自衛隊との架け橋！

【イタリア国に見る地震等発災対処の取り組みと我が国の根本的な課題】

湘南支部長 清崎忠園

能登半島地震発生から50日が経つ。この間の石川県全般的被災状況等また集団避難、2次避難が生じ、そして1月15日現在で災害関連死を含め222名の死者が発生している。また1月16日の新聞報道では孤立住民の命つなぐ自衛隊員「道なき道」物資輸送、“仮設（住宅）着工”などのタイトルについて詳細に被災者の状況を伝えている。

筆者は地震発生から1週間以内の被害状況、住民の避難状況、避難先の生活の状況、即ち寝る場所、食事、生活一般等のテレビ報道を見るにつけこれまでの多くの大震災が発生したその時の被災対処、対応と問題点はほとんど同じ内容ではな

いかと言う認識に基づく疑問と憤りである。我が国の地震や津波災害等に対する対処は果たして改善されているのだろうか、もし改善されているとすればそれはどのような内容なのかを政府は国民に報道し知らせ、また都道府県としてもそれぞれの自治体での対処内容について、今回の能登半島地震を通じて知らせるべきであろう。

しかしそのような内容は残念ながら寡聞にして知らない。即ち地震国と言われる我が国の地震災害に対する被災者側に立った対応について改善されているという報道にあったことは今回も無い。

ただあるのは地震発生後の地震予知報道とも言える。実は・・・には何とか地震帯があり・・・”式の学者的解説に終始している”と思えない。

筆者の記憶では地震予知研究についてある外国人科学者が「地震予知研究に注ぎ込む莫大な予算を、地震による被害の予測や被害対処の研究及び被害者救済に対する具体的な各種の構築等に回す方が賢明である」と言うような主旨の主張を行っていた記事を思い出す。

要は、地震予知と地震被害抑制、防止のための研究のどちらが現実的かの主張であったと思う。筆者にはどちらの研究が優先すべきかは分からないが、本稿は地震発生時の被害者に関するどのような施策が我が国にはあるのだろうかという疑問について述べる。

【イタリアの防災対策について】

拓殖大学特任教授・防災教育研究センター長の濱口和久氏の正論での記事が目についた。以下その主要点を簡単にまとめ引用する。

○日本は地震大国であり今後高い確率で発生する恐れがある首都直下地震や南海トラフ巨大地震が起きる地域に限らず、日本列島のどの地域に暮らしていても日本人は常に地震リスクと隣り合わせであるということを理解しておくべきである。

○改善されない日本の避難所の環境

・能登半島地震で多くの住宅が全半

壊し避難所での生活を余儀なくされている。

しかしながら、避難所自体が被害を受けており、発災後数日間は何も電、暖房が無い状態、断水、トイレ等の問題が深刻で、加えて体育館等での床にじかに布団や毛布で寝ることは極めて非衛生的であり健康上不適切である。床から30センチ以上の高さが必要。加えてプライバシーの確保の問題もある。――避難所の環境は阪神・淡路大震災（平成7年1月17日発生）の時からほとんど改善されていない。

・日本の避難所の環境の悪さは「先進国の中で最低のレベル」とも言われている。

○紛争や災害の際の避難所の環境水準を定めた国際基準に「スフィア基準」というものがあり、多数の難民や被災者が発生した場合の人権、声明を守るための最低限の基準として国際赤十字などが設定したものである。――我が国の避難所は一部の施設を除けばこの基準から程遠い状態。

○イタリアの即応体制

イタリアでは発災後、政府からその日のうちに「緊急事態宣言」が発出されると、州（自治体）が備蓄している「テント各国の主要な、簡易ベット、トイレ」をユニットとして、大型トレーラー数台で運ぶ体制が整えられている。

遅くとも2日目には簡易ベッド、冷暖房機が設置、家族単位のテント、トイレは衛生環境が保たれシ

ヤワーも完備されている。また周辺の州からはキッチンカーが急行し食堂用大テントの中で温かい食事ができる。パンやおにぎりといった日本の避難所とは対照的。

○イタリアの災害ボランティア制度

イタリアの災害ボランティアは、事前に災害対応の研修や訓練を受け、ボランティア団体に、災害加権希望登録を済ませており、被災地に派遣される場合は日当・交通費・労災保険が提供される。

このようなボランティアが全土で120万人以上いる。

【我が国の課題】

以上の濱口和久氏の記事に触れ、筆者の我が国の地震対策の不備だらけに対する解決策を見い出せたように感じた。

イタリア国がかくも素晴らしい対応をしていることから、次の様に我が国の課題を見出した。

・外務省は、主要各国についてイタリアのような対応がどのようなようになされているか大使館を通じて早急に研究させること。

・各自自治体に対しては、各自自治体独自のイタリアのような対応策を構築させ、安易に自衛隊への災害派遣要請に依存しないと言う強い意志を持たせること。

・災害ボランティアについてイタリア方式の日本版を研究 至急に構築すること。

・更に緊急事態に関して問題になるのが国民保護 防護のシエルトの

研究、早急な構築が喫緊の課題ともなりつつある。これは多分に地震等発生対処時の取り組みとも噛み合わせる必要があり別問題ではない。

政府は3月末、地下シェルターについてその整備に関する基本方針を策定する。我が国を取り巻く信用できない外国からのミサイル攻撃、最悪の場合には核攻撃にも備える必要性は急速に高まっており喫緊の課題である。スイスやイスラエルなど人口当たりの普及率が100%の国もあるようだ。



イタリアの避難所

現在ウクライナ国民はシェルターや建物の地下室、地下鉄の構内で避難しているようだが、実生活の様子は中々報道されておらず分からない。この地下シェルターが完備されれば災害発生時の避難場所として当然活用される。

なお、湘南支部の5月末の総会時の防衛講演会では、このシェルターに関する講演を計画している。(以上)

湘南支部

令和5年第2回名所旧跡探勝ハイキング

支部理事役 西村 剛

予定の2月18日(日)に、心配していた天気は曇りながら、予定通りの行程で実施する事が出来ました。

早朝に小雨が降った後でもあり、少々湿気を感じる中での、参加者9名による

散策と成った。

下曾我駅前を予定通りの時刻(10:30)に出発し、先ずは「梅の里センター」を訪れる。曾我の里名物の、梅干しを中心とした各種の展示品が並び、販売コーナーもあり、また地元の名人達が腕を競った「梅干し品評会」提出の作品はどれも立派な物ばかりである。

その後、流鏝馬会場でもある原梅林を通り、メインの会場である別所梅林をじっくりと観賞する。

この中ほどにある「八幡社」周辺には「梅の里食堂」や、売店等が並び、約1時間の自由行動(昼食・休憩)とする。梅林内にて集合写真



曾我の梅林(別所梅林)

真を撮りつつ進み、次に「小田原牧場アイス工房」を訪れる。少々肌寒い中ではあるが、バライティにとんだ各種のアイスの中より、各自お好みの物をチョイスし堪能する。

さて、これからが丘陵地帯に位置する「城前寺・宗我神社」を目指しての、農耕地帯の裏道の散策である。(梅の木・柑橘類の植木・梅の天日干し場・選果場などを鑑賞しつつの移動) 25分ほど進むと城前寺(曾我兄弟の菩提寺)が見えてくる。急な石段を上りやと境内に到着し、背後を眺めると相模湾がやや遠方に眺望できる。



城前寺(曾我兄弟の菩提寺)

参加の後、本堂の左脇より境内の奥へ

と進む。そこには曾我兄弟の墓石や石像等があり、また寺の背後には、昔は「曾我城」が在ったとのことで、そのなごりの「土塁」が見てとれる。その後、「宗我神社」を目指し、又しても上り坂を攻める(年配者への配慮を忘れず、ゆっくりと登坂)。



宗我神社(旧曾我郷の総鎮守)

ここは「旧曾我郷」の総鎮守様とのことで、拝殿前にて太綱で鈴を鳴らし拝礼する。記念の集合写真を撮ったのち総門の大鳥居下にて一礼し、参道の下り坂を遠望を眺めつつ下曾我駅へ向かう。皆様方々の健脚により、予定より小一時間ほど早めのゴールでありました。

中東情勢

支部理事役 深澤文晴

イスラエル軍は11日夜から12日未明にかけ、パレスチナ自治区ガザ地区南部のラファを空爆した。同時に、ラファ市内で地上作戦を実施し、人質2人を救出したと明らかにした。その一方でこのラファという所には多くのパレスチナ人が避難をしている。ガザ地区保健当局の発表では12日時点で67人の民間人が死亡したとしている。このラファへの地上作戦が国内外から大きな批判を呼んでおりイスラエル国民も反対をしている。

このラファの地上作戦の発表がされた時にイスラエル国内で反政権デモ、ネタニヤフ首相に対しての退陣要求デモが非常に大規模に行われた。イスラエルの民意と政権の対立になっている。イスラエルの民意が勝ちネタニヤフ政権が引きずり降ろされてこの戦争が止まる可能性も僅かに残っている。エジプトとの境界にあるラファの人口は、イスラエルとハマスの戦争が始まる前まで、約25万人だった。しかし、現在はガザ各地から避難者が押し寄せ、国連によると150万人に膨れ上がっている。

新入会員のお知らせ(敬称略)

正会員

・藤澤 豊 元海上自衛隊

支部会員の訃報

謹んでご冥福をお祈り致します

正会員 故 矢野 大介 氏

令和5年8月27日 ご逝去

「支部の予定」

- ・03/03 (日) 自衛隊音楽まつり
- ・03/09 (土) 第12回支部理事役会
- ・03/10 (日) 掃海艇「えのしま」見送り行事
- ・03/25 (月) 3月隊友紙発送

編集後記

エストニアの情報機関によると、NATOは今後10年以内にロシアと戦争状態に陥る可能性があると指摘している。今後とも各種ジャンルに亘る、ご寄稿のご協力を宜しくお願い致します。